

(編者注) 「サッラッラーフアライヒワサッラム」「アライヒッサラートワッサラーム」とは、預言者ムハンマドについての祈願文で、「彼（ムハンマド）に祝福と平安がありますように」という意味です。

.....

『40のハディース』学習ノート（第21回）

[第19のハディース その2]

イブン・アッバースは言った。

ある日、私が預言者（サッラッラーフアライヒワサッラム）の後ろにいたとき、預言者は私に言われた。「少年よ、おまえにいくつか言葉を教えよう。アッラーを保ちなさい、アッラーはおまえを保ってくださるだろう。アッラーを念頭に保ちなさい、アッラーを自分のすぐ前に見いだすだろう。願い事をするのなら、アッラーに願いなさい。助けを求める時にはアッラーに助けを求めるなさい。人々が集まって何らかの手段でおまえの役に立つとしても、（至高なる）アッラーがおまえに書き定められたことをもって以外には役立つことはなく、人々が集まって何らかの手段でおまえに害をなそうとしても、（至高なる）アッラーがおまえに書き定められたことによって以外には害をなすことはできないと知りなさい。筆は取り上げられ、頁は乾いてしまっているのである。」（アッ=ティルミズィー）

別の伝承では、「アッラーを念頭に保ちなさい、おまえの前にアッラーを見いだすだろう。幸福においてアッラーと親しみなさい、不幸においてアッラーはおまえに目を止めてくださるだろう。おまえを外れた運命はおまえに起きるようにはなっていなかったのだ。またおまえに起きたことはおまえを外れるようにはなっていなかったのだと知りなさい。勝利は忍耐と共にあり、安楽は苦難と共に、苦と共に楽はあるのだと知りなさい。」

「筆は取り上げられ、頁は乾いてしまっている。」筆とは言うまでもなく、我タ一人一人の運命を書き留めた筆のことです。「まことにアッラーが最初に創造し給うたのは筆です。それから、『書け』と命じ給い、筆は審判の日までのことを書き留めました。」とハディースにあります。「アッラーは天地を創造する 5000 年も前に被造物の運命を書き留められ」ているのです。ムスリムはカダル（宿命）を信じなければなりません。第 4 のハディースのところでも触れましたが、宿命があると知ったある男がアッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）に尋ねました。「アッラーの御使いよ、それならば今日の行為はなんですか。それについては筆は乾き、それについては決まったことが生じているのですか、それともこれから起こるのですか。」すると言われた。「いやいや、それについては筆は乾き、それについては決まったことが生じているのだ。」「では、行為はどうなるのですか。」と尋ねると、「行いなさい。すべては、創造された目的にそって容易にされているのだから。」と言われました。つまり、楽園に行く定めのある者にはそこに至る善行が容易く、火獄に行く定めにある者にはそこに至る悪行が容易いのです。自分のしたいことをしていけば、自ずと自分に定められた来世の地に至るということです。私たちの地が楽園と定められていますよう。私たちにとって楽園へと続く行為が易しいものでありますように。アーミーン。

「人々が集まって何らかの手段でおまえの役に立とうとしても、（至高なる）アッラーがおまえに書き定められたことをもって以外には役立つことはなく、人々が集まって何らかの手段でおまえに害をなそうとしても、（至高なる）アッラーがおまえに書き定められたことによって以外には害をなすことはないと知りない。」私たちの身に降りかかるることは、幸福も不幸も、すべてはあらかじめ決定されており、その運命に反することは全人類をあげて

もなしません。『言ってやれ、アッラーが書き給うことのほかは我らに降りかかることがない』（第 9 章 [悔悟] 51 節）、『地上およびおまえたち自身に起こる災難で、我らがそれを引き起こす以前に書に記されていないものはない。』（第 57 章 [鉄] 22 節）アッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）も、「すべてのものには真髓があります。しもべは、自分を襲ったものは自分を逸れるようにはなっておらず、自分を逸れたものは自分を襲ったようにはなっていなかったのだと知るまで信仰の真髓に達したとはいえません。」と言われます。

災いを与えるのも益をもたらすのも、ものを授けるのも禁じるのもアッラーおひとりのみです。であれば、私たちが恐れるべき相手も、期待すべき相手も、愛すべき相手も、祈り求めるべき相手もアッラー以外にはありえません。どんな人間に従うことよりもアッラーに従うことを優先すべきなのもそのためです。また、どんな人間の不評を買うよりもアッラーの御不興を買うことを恐れるべきなのもそのためです。

多神教徒たちは苦境においては天を仰ぎ、神に救いを求めるが、困難が立ち去るや神のことを忘れ、なんの助けももたらしは得ない偶像を崇拝し始めます。そのような者たちに対しアッラーは仰せられます。『言ってやれ、おまえたちがアッラーを差し置いて祈るものは、アッラーが私たちに災いを望み給うとき、その災いを取り除いてくれようか。アッラーが私に恵みを望み給うとき、その恵みを引き止めることができようか。言ってやれ、私にはアッラーで十分、より頼む者は彼により頼む、と』（第 39 章 [集団] 38 節）

また、アッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）は、「嫌なことの忍耐には、よいことがたくさんあると知りなさい。」とも言われました。つまり、しもべを襲う辛

い困難、不幸はあらかじめ書き留められたものであり、それを耐えられることによって、得るところが多い、ということです。イブン・アッバースによると、この言葉の前に「アッラーのために確信をもち満足して行動できるものはそうしなさい。それができないなら、嫌なことでも忍耐すれば、よいことがたくさんあります。」と言われたということです。確信をもって行動するとは、自分を襲った運命は間違って襲ったのではない、襲うべくして襲ったのだ、アッラーがそう定められたことなのだ、と納得し、それをアッラーの賜物として喜んで受け止めるということです。より強い信仰を持った者はそのように己の宿命に満足します。「アッラーはある民を愛し給うと、彼らに試練をお与えになります。それに満足する者には満足が待っており、それを嫌う者には嫌なことが待っています。」

アッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）はドゥアーの中で、「宿命の後には満足をください」と祈されました。

「アッラーは、信仰者に対しては、彼にとってよいことしか定められない。幸福が襲ったら、感謝することが彼にはよく、不幸が襲ったら耐えることが彼にはよいのです。それは信者にしかできないことです。」すべて恵みと喜びに満ちたものとなります。辛い宿命も、そうした積極的な受け止め方をすれば、その苦しみは軽いものとなるでしょう。

しかし、不幸を喜んで受け止めることはなかなかできないことです。「それができなければ耐えなさい」とアッラーの御使い（サッラッラーフアライヒワサッラム）は言われます。不幸に満足することは特に強い信仰をもった者にのみできることでしょうが、不幸に耐えることはムスリムにとって義務です。『耐える者には限りない報償がふんだんに与えられる。』（第39章〔集団〕10節）、『・・・そして耐える者たちに吉報を伝えよ。災難が彼らを

襲えば、まことに我らはアッラーのもの、我らは彼の許に帰る定めにあります、と言う者、そうした者には彼らの主からの祝福と慈悲があるだろう。そうした者こそ導かれた者である。』(第2章【雌牛】155~157節) 耐えることは、苦しみ、悲しみのあまりに宿命に対し怒りを覚えることを防ぎ、心の痛みが増大することを止めてくれるでしょう。耐えるものにはその忍耐は軽いものとなり、くよくよと思い煩い悲しむものには喜びは少なくなります。

誰も死や負傷による痛みを好む者はいません。しかしジハード(アッラーのための闘い)の必要が迫ったときには、忍耐して敵に挑まなければなりません。内なる敵との闘いも同様です。内なる敵とは己自身、己の欲望のことです。アッラーの御使い(サッラッラーフアライヒワサッラム)は言されました。「ムジャーヒド(闘う者)とはアッラーにおいて自己と闘う者のことです。」「あなたの敵とは、あなたを殺せばあなたを天国に行かせ、あなたが殺せばあなたにとって光となる者ではありません。最大の敵とはあなた自身のことです。」自己との闘いにも忍耐は欠かせません。自己との闘いに耐え、欲望を克服し、己の内なるシマイターンを打ち負かしたとき、人は自己の支配者、王者となります。そしてそれは極めて偉大な王者となることです。逆に自己との闘いに敗れた者は、みじめな欲望の虜となりはてるのであります。

「勝利は忍耐と共にあり、安楽は苦難と共に、苦と共に楽はあるのだ」と御使い(サッラッラーフアライヒワサッラム)は言されました。これは『まことに苦と共に楽はある、苦と共に楽はある』(第94章【胸を広げる】)というアッラーの御言葉を再確認する者です。クルアーンの中に語られる諸預言者の話は一様にそれを証言しています。箱舟によって洪水から救われたヌーフも、息子を犠牲に捧げようとしたイブラーヒームも、フィルアウンの追

手から海を渡ることによって逃れたムーサーも、少数のムスリムによって敵の大軍を打ち負かしたムハンマド（彼らに平安あれ）も、みな困難に際しアッラーにより頼み、耐え忍び、アッラーからの救援を得ています。これらの例は、人に頼らず、アッラーにのみより頼むこそこそ本当のアッラーへの信頼であり、その信頼さえあればなにものも恐れることはないことを教えています。『アッラーを畏れる者にアッラーは出口を設け、思わぬところから糧を授け給う。アッラーをより頼む者にはアッラーのみで充分である。』（第 65 章 [離婚] 2・3 節）

ムーサーがアッラーに願い事をしましたが、一向にそれが叶えられる様子がありませんでした。それに対し彼は「マーシャーアッラー（アッラーのお望みのままに）」と言うと、まさにそのとき願い事は叶い、アッラーは彼に啓示して、「おまえのその『マーシャーアッラー』という言葉が願いを叶えさせたのだ」と言われました。たくさんの反省すべき点がないかを振り返り、自分にとって願い事が兼ねられることがよいのであればきっとすでに叶えられていたであろう、と自分に言い聞かせるべきです。あるところに崇拝行為に勤しむ男がいました。あるとき彼に願い事ができ、アッラーにそれを求めつつ、毎土曜日には 11 個のなつめやしだけを食べ祈りを捧げましたが 70 週を経ても一向に願いが叶えられません。そこで彼は自分を反省し、それが私にとってよいことならばあなたから与えられていたでしょう、とアッラーに呼びかけました。するとまさにそのとき天使が彼のもとに降り立ち、「過去のどんな崇拝行為よりも今の心情こそ優れています。それでアッラーはあなたの願いをお叶えになりました。」と言ったということです。

